

## 河川・流域（15）（3-B-14-4～3-B-16-1）

本セッションでは、流域における微量汚染物質の汚染状況、動態に関する研究課題6題が発表された。様々な汚染物質の報告とともに、水生生態への影響を実態調査した報告もあり、両者をつなぐ研究が今後発展することを望みたい。

3-B-14-4 は、雨天時を含めたダイオキシン類の河川からの流出を実測し、年間を通じた汚濁負荷量を求めた challenging な研究である。対象流域では水田の農薬由来よりも大気に由来する森林土壌のダイオキシン類の流出量が多いことを明らかにしている。

3-B-15-1 は、溶存態や懸濁態のエストロゲンが排水施設や河川から海域に流出する場合、汽水域でどのような動態を取るのかを実験的な方法で検討したものである。この結果、汽水域で懸濁物凝集が起っても、エストロゲンは溶存態に多く分配するため、ほとんど濃度変化しないことが報告された。

3-B-15-2 は、ポリカーボネイト樹脂が使われているカーポートなどの屋外建造物から、ビスフェノール A がどの程度降雨によって溶出するのかを現場実験で追ったものである。この結果、使用状況を含めたシートの種類により溶出量は異なるが、調査対象水域での流出負荷に占める割合は小さいと報告された。

3-B-15-3 は、ステロイドホルモンの一種である Glucocorticoid の下水処理場、およびその放流先水域での汚染に関する中国からの報告である。6 種類の対象物質は下水処理での除去状況が異なること、また嫌気環境下では除去が進むが、むしろ好気環境下では除去が進まないとの興味深い報告がなされた。

3-B-15-4 は有機スズ化合物（TBT, TPT）の底質中濃度と巻貝イボニシのオス化現象であるインポセックス発生率との関係を、播磨灘で実態調査した報告である。両者の間に強い正の相関が見られ、底質濃度は、天然カキやイボニシの体内の有機スズ化合物濃度とも強い正の相関がみられるとのことであった。

3-B-16-1 は、絶滅が危惧されるムサシトミヨの生息域である河川での界面活性剤 LAS、ポリオキシエチレンラウリルエーテルおよび蛍光増白剤 DSBP の汚染状況とムサシトミヨの生息範囲の関係を調べた報告である。この結果、これらの物質が検出され、生活排水の影響が見られる水域ではムサシトミヨの生息はほとんど見られていないと報告された。

（京都大学大学院・流域圏総合環境質研究セ 田中 宏明）